

第一回 ドナーファミリーの集い
第一回 ラン・フォー・ビジョン～チャリティマラソン大会～
報告書

日時：平成10年10月10日（土）

於：サンケイ会館（第一部）

皇居周回路（第二部）

（添付資料）

- 1) 第一回「ドナーファミリーの集い」プログラム
- 2) 第一部 講演内容
- 3) 出席・参加者数
- 4) 会計報告書

第一回 ドナーファミリーの集い

—「角膜の移植に関する法律」施行40周年記念—

日時：平成10年10月10日（土） 午前10時～午後4時

場所：第一部；サンケイ会館 第二部；皇居周回路

Program

第一部：

司会：桑奈佳代（日本俳優連合）

- 10:00 開会の辞： 坪田一男 角膜センター・アイバンク運営委員長
10:05 来賓挨拶： 眞鍋禮三 大阪大学医学部眼科学教室名誉教授
10:10 祝 辞： 山本尚子 厚生省エイズ疾病対策課臓器移植対策室室長補佐
10:20 黙 禱：
10:21 講演 I： 篠崎尚史 東京歯科大学角膜センター長
「アイバンク活動と角膜移植」
10:40 講演 II： 許斐健二 角膜移植患者代表
「角膜移植を受けて」
10:55 講演 III： ドナーファミリー代表
「ドナーの家族として」
11:10 移植患者・ドナーファミリーの声 朗読： 日本俳優連合
11:30 功労者表彰 今泉亀撤先生 岩手医科大学名誉教授
プレゼンター： 横瀬寛一 角膜センター・アイバンク運営委員
11:45 閉会

昼 食 （各 自）

第二部：チャリティマラソン大会 「ラン・フォー・ビジョン」

司会：大桃美代子 / 藤島 浩（東京歯科大学眼科）

- 13:00 開会の辞： 坪田一男 角膜センター・アイバンク運営委員長
13:05 祝 辞： 山本尚子 厚生省エイズ疾病対策課臓器移植対策室室長補佐
集合場所： 千鳥ヶ淵公園
1kmウォーク, 5km, 10kmマラソン
(参加費：3000円、参加賞：T-シャツ、視覚障害者には伴走紹介有り)
15:30 閉会の辞： 篠崎尚史 東京歯科大学角膜センター長

主催：東京歯科大学市川総合病院 角膜センター・アイバンク

共催：(財)静岡県アイバンク、(財)富山県アイバンク

後援：厚生省、東京都眼科医会、東京視覚障害者ランニングクラブ、
麻布ライオンズクラブ、他

協賛：(株)VISC JAPAN、日本航空(株)、(株)エスアールエル、興和(株)、他

第一部 講演内容：

I 篠崎尚史

東京歯科大学市川総合病院角膜センター長

「アイバンク活動と角膜移植」

角膜移植を受けることにより光を取り戻すことのできる患者さんが、毎年多数発生しています。しかし、提供される角膜の絶対数が不足しているため、手術の待機年数が数年にわたることが相当あり、諸外国、特にアメリカと比べると格段の差がみられます。この現状をこのままにしておいてはいけないと考え、積極的にアイバンク活動を行っておりますが、啓発活動の効果は著しいものがあり、NHKテレビの「クローズアップ現代」で放送されたときには反響、特にドナー登録の申出等が相当ありました。

私が日頃コーディネーターとしていつも心掛けているのは、ただ単に角膜の提供をお願いするというのではなく、常にドナー側の方のご意思、ご感情を尊重し、ご説明させて頂くという姿勢を貫きたいということです。ご家族が亡くなった時に承諾を下さって、人のためになるのであればと、ご提供下さらない限り、移植はできないわけです。ところが、自分の愛する、何十年も連れ添った肉親が万が一の時に、「人のためになるから」などと考えられるでしょうか。私自身も考えましたが、もし、自分の4歳になる息子が交通事故にあい、命を落としたとした場合、「この子の眼をあげる」などと考えられるであろうか。その時、私には考えられる自信がありませんでした。普段からこれだけ移植医療に携わっているながら、そしてこの移植医療が役に立っているのだと良く理解しているながらも、本当に自分がその立場になった場合、とても自信がありませんでした。

ご提供して頂いた臓器なり角膜があつて、それで患者さんがお待ちになっていて、それを移植して患者さんが見えるようになったり、或いは元気になったりということは医療中のことであり、ご遺族が「提供するか」、「しないか」、というのは全く医療では無いのです。それを今までは移植医療の概念の中で捕えてきたということが大きな誤りであったと私は思います。ご家族の皆様とお話しすると、「どうしよう」と一生懸命考えて下さいます。今日も、ドナーファミリーであり、過去に当眼科のスタッフだった方がご姉弟で来て下さっていますが、移植を行っている彼等でさえ、やはり肉親に万が一のことがあつた時に、かなり葛藤があつたと思います。彼も私がこれだけ（アイバンクに関して）こういう立場でがんばっているのだから、提供しなければ

いけないと思うと、その時言って下さったのです。しかし、私はそこで「もう一つ考えて欲しい。自分の立場がどうこうで、義務感をもってはいけないのではないか。」と彼に言いました。彼は一晩、ほとんど寝ずに考え、次の日の朝、電話を頂き「決心した」と言って下さいました。

提供するか、しないか、という問題は非常に難しい問題で、これは皆さんの任意性の問題だと思います。本当に中立の立場で、自分の価値観、人生観、宗教観、色々な気持ちがあるかと思いますが、一人一人がそれを考えて「人の役に立つのだから上げよう」或いは「やはり踏み切れないからやめよう」と思うのは個人の自由な意思だと思います。

私がこれまでに活動してきて、ドナーのご遺族の方々との出会いの中で、それぞれの愛や深い思いやりのお心に、その度ごとに感銘をうけ、感動いたしました。本日は、それを皆様にもぜひ知って頂きたいと思います。

II 許斐健二

「角膜移植患者の会」会長

「角膜移植をうけて」

今日は、角膜移植をうけた患者のひとりとして、角膜移植前後の体験や、感じたことを少し、お話ししたいと思います。

僕が角膜移植をうけたのは、右目ですが、今から6年前の医学部5年生の時でした。高校まで、視力は両目とも1,2くらいあり、部活動を熱心にやっていました。大学で医学部に入り、これからは勉強を頑張ろうと思い、図書館で本を読んでいた時、文字が二重に見えるようになったのが、最初の症状だったと思います。初めは目が疲れているのかなと思っていましたが、何日たっても良くならないので、眼科に行ったところ、円錐角膜ではないかと言われました。円錐角膜は角膜が円錐形をしてくるので、乱視や近視がひどくなります。以後ぼくは眼鏡、コンタクトレンズなどで対症療法をすることになりました。診断がついても、根本的には病気の進行をとめる方法がなかったため、対症療法で様子をみていましたが、結局角膜が混濁し、コンタクトレンズを2枚しても矯正視力が出なくなったことで、角膜移植の適応となりました。

移植をうけたのは東京歯科大学市川総合病院でした。当時はこの病院にはアイバンクはなく、この時はじめて、アイバンクの活動が日本ではまだまだ遅れていること、角膜が足りていないことを知りました。移植をうけることになり、一番期待したことは、右目がよくみえるようになった

てくれること、一番心配したことは拒絶反応のことでした。手術室に入った時のことや、局所麻酔のため、手術をうけている目からぼんやり光りが見えていたこと、ボビーブラウンの曲が流れていたこと。手術後、手術はとてもうまくいったと坪田先生から聞き、ホッとひと安心したことなどは今でもよく覚えています。

翌日には眼帯も外れ、最初に手術をうけた右目で物を見た時は、まだ痛くて涙がぼろぼろ出て、鏡の前にいき、どんなふうになっているんだろうと覗き込んで、充血している右目をみて、これから良く見えるようになるのかなと心配したのも覚えています。術後、日に日に視力が出てきて、それまでは、右目ではものを顔にくっつけるくらい近付けないと見えていなかったものが、病院からの外出許可をもらい出かけた際、車の助手席から前の車のナンバープレートの数字が確認でき、とてもうれしくて、なんどもなんども左目をかくして、右目だけで、車の外の風景を見ていました。そんな自分の姿が一番印象に残っています。

その後、経過も順調で拒絶反応もなく、いまでも右目の角膜が元気です。僕がいただいた角膜がどのような方からのものなのか、またその御遺族がどんな方なのか、僕は全く知りません。感謝の気持ちを直接伝える方法はありませんが、角膜を大切にしていけることが、僕達患者にできる一番のドナーの方への孝行、感謝の気持ちの表わし方ではないかと思っています。

僕はこの6月から、アイバンクで働いています。移植をうけた患者さんには必ず、いただいた角膜の大切さを説明しています。どうしたら、大切にできるか、その一番は先生にいわれた通り、きちんと目薬をさしたり、内服が必要であれば、きちんと薬を飲むこと、目をほっばらかにしないことで、自分の病気をよく理解するようになっていきます。先生まかせにするのではなく、患者自身が、自分達で病気を理解し、お互い助け合ったり、情報交換できるようにと、今年の春には角膜移植患者の会が発足しました。今日はその会の総会がこのセッションの前にあり、この中にも角膜移植をうけた患者さんが多数きています。後で、僕以外の患者さんの声を朗読していただけるようお願いしてありますので、ドナーファミリーの方には是非聞いていただきたいと思っています。

また、今日、ドナーファミリーの代表の方の話をする僕や患者さんはとても幸せだと思いますし、良い言い方がありませんが、楽しみにしています。どんなお気持ちで献眼の御決断をされ、その後、どんなふうになっているのか、僕達のところにはそう言った話しは伝わってきません。個人情報として伝わってはいけないことだと思いますが、このような会でそう言った話を聞くことができるのは僕達患者にとっては、素晴らしいことで、角膜移植医療がどうい

ったものであるのか、再認識できる良い機会だと思っています。

これまで内科医として4年、そして今年の6月からはアイバンクで移植医療に携わるようになりましたが、僕が一番強く感じることは、それは患者として、アイバンクで働くものとして、そして、医師として、ですが移植医療が本当にたくさんの人々の善意の上に成り立っていて、その善意というものが医療の発展には必要不可欠であるということです。

どんなに医学、医療技術が進歩しても人の心が通わない医療となってしまうたら、それはきっと正しくないものになるのではないのでしょうか。移植医療に反対される人がいるのは事実です。ですが、僕がいままで感じた善意、人のやさしさというものは決して間違っていないものだと確信しています。ですから、これからはもっとこの角膜移植医療を発展させたいと思っています。いつの日か、人工角膜ができたり、予防医学が発達して、角膜移植がいらなくなる日がくるかもしれません。でもそれは今すぐできるものではないようです。それまでは誰かが頑張らないと角膜移植医療もいままで以上にはならないと思います。

今日こちらに来てくださっている方々には是非、一度なにかが医療に大切なことなのか、一緒に考えていただけたらなと思っています。いまの僕はそんなことを角膜移植医療をうけて考えています。

III

ドナーファミリー代表

「ドナーの家族として」

昨今、臓器移植、脳死問題、クローンニングなどの諸問題が世間一般でも話題にのぼるようになりましたが、今現在のわたくしには、こういった最先端をいく医学の技術と自分あるいは周囲の人々を、近く結びつけることが、まだできないでいます。つまり、自分がそういったことに直面したときにどうしたものか、どうしたいのか、ピンときていず、結論がでないのです。ですから、今回こうして、献眼について、経験者として、体験したドナーファミリーとしてお話しさせていただくわけですが、わたくしは今ここで、献眼という行為の是非、それを声高に啓蒙すること「さあ、皆さんもどうぞ、どうぞ」といった、勧誘めいたことについてまで云い及ぶ力はございません。ただ単に、昨年なくなりました父と共にした、たった一つの、一度限りの経験についてを皆さんにご披露するような心持ちで始めさせていただき、それがわたくしに与えたもの、私

の糧となって、今後残っていくであろう、と思われましたことを、お話しさせていただきたいと思ひます。今までに、まだ圧倒的にドナー不足と云われておりますが過去にいくつもの家族がそれぞれの思い、事情、あるいは苦悩を経て至った献眼という行為、云ってみれば家族の一大事の中で生まれた数々のエピソードがあったことと思ひます。その中の一つの例としてお聞きいただければ、と思ひます。父とわたくしは、こういう家族あるいは親子であった、ということの結果なのです。

本日は秋晴れで過ごしやすい日となり、今朝こちらに向かいますときもとても気持ちの良い思いで参りましたが、わたくしは、今年の今頃が暑かったのか寒かったのか、晴れだったか雨だったか、また、その頃の一番のニュースは何だったのか、どんな歌が流行っていたのかまったく覚えていません。今年の10月はまさに今ごろだったのですが、肝臓を患い、長く入院しておりました父の容態が徐々に悪化し、いわゆる危篤という状態に陥った頃でした。それまでわたくしは父の看病のため大学病院の集中治療室に日々通っていましたが、この頃から父の命は1日1日と尽きていくようで、担当医からも、私ももう病院に寝泊まりして父のそばにいるように、と云われた頃だったのです。こういった父の闘病と、わたくしの看病の日々のお話しをするのに、ここで少しわたくしの家族についてご説明が必要だと思ひれます。

まず、父とわたくしはたった2人きりの家族でした。わたくしは7年前に母を亡くし、兄弟もありませんので、父が病に倒れ、入院、となれば、おのずとわたくししかその面倒を見る者はいませんでした。現代社会の欠点を絵に描いたように、わが一族郎党はそれぞれに忙しいもので、受験生や老人を抱えた家族があり、仕事があり、生活がありましたので、わたくしに交替要員はまったく云っていいほどなく、父の病状、治療方針、その費用など、すべてわたくしの責任の上で、考えられ、進められることになっていきました。病院のスタッフの皆さんの献身的で賢明なご尽力にもかかわらず、不幸にも父の病は命に拘わることとなり、その最期までの時間もすぐそこに計算できるような事態になりました。この頃わたくしは、担当医と幾度となく父の治療方針についてのディスカッションを行っておりました。担当医は病状を丁寧に説明してくれ、また辛抱強くわたくしの言い分を聞いてもくださり、所謂インフォームド・コンセントが理想的な形で成り立ち、ひとつひとつ納得した上で、父のために、より良く終末医療を施そうと日々努めておりました。父のベッドサイドで「父は死にゆく人なんだ。もうすぐ父との永遠の別れが来るんだ。じゃあ、今、わたしは何をするべきなんだろう。その時をどう迎えたらいいいんだろう」などと思ひ始めたその時、わたくしに「献眼」という考えが生まれました。

お話しが少し戻りますが、父とわたくしは7年前に母の臨終を経験しておりました。当時わたくしは、医学関係の機関に勤務しており、幸いにも母の入院はその職場と軒続きの付属病院でした。3人家族の中で要となっていた母が、突然重い病に倒れ、手を尽くしても、もう命を救うことができない、となった時、父とわたくし、親類の者すべてが、精神的に大きく打ちのめされ、取り乱し、呆然自失、といった状態になりました。担当医らはわたくしの上司や所属部内の医師たちでしたので、患者である母だけでなく、周囲のわたくしたちへのケアも手厚くしていただいております。わたくしは、日頃、彼らが医学、あるいは医療の従事者として各々仕事に邁進している姿を見ていたこともあり、つらい看病の日々も感謝の気持ちいっぱいでも過ごしておりました。いよいよ母が息を引き取りました時、主治医から「つらいだろうけれど、今後の医学の発展のために解剖を」というオファーがありました。わたくしは母の命を奪った病巣を取り除いてほしい一心で、承知しました。それにより、母の遺体は以前の健康だったときの形に戻り、その姿で天国へ旅立てるのだと信じたかったのです。直後には思いつきませんでしたでしたが、以後、母のその病巣は研究のためその病院に保管されていることに気付き、同じ敷地内での勤務中に、母の、死に至る病が無駄ではなかったこと、悪かった部分とはいえ、母の身体の一部が、将来の医学研究に役立つために存在しているということをじわりじわりと感ずることができました。これは、伴侶を亡くし、身体の半分をもぎ取られるような悲しみを味わった父も同じ心持ちだったことと思います。父とわたくしにはこういった経験があったのです。ですから、今後、父が臨終を迎えるという不幸に見舞われたとき、わたくしには、父がその一生を終えるその時を決して無駄にはしない、という強い覚悟がありました。父は、もはや意識が遠のいて、眠っているばかりとなり、ものを聞くこともやめているようでした。そういう父のベッドサイドで、わたくしはずっと父に話しかけていました。わたくしは父が病と闘う姿に、素晴らしく、逞しい、人間の強さを感じていました。それをわたくしに、身をもって示してくれた父に、その父からの教育に感謝していました。そしてこの父の娘であったことに誇りを覚えました。親不孝なもので、元気なときには礼を云うどころか全くそんな素振りさえ、見せることができませんでした。父の一生の中の最期の数週間、わたくしは父にそう語り続けました。そうしている間に、わたくしに妙案が浮かんだのです。この父とわたくしが親子であった証として、二人の人生が重なっている時間に、最期に一緒にできることを考えたいと思いました。もはや、父の意識はなく、同意を得ることはできませんし、云うまでもなく、もちろん動くことすらできないので、何をするというわけにはいきません。そこで母のように、この身体を以てして何か貢献すること、という考えに至ったのです。

ずっと以前に家庭内でそんな話題になったこともありましたが、わが家ではそれが即、献血に行く、などの行動に移されたことはなく、当然、臓器提供の登録などは思いつきもしませんでした。けれどもこの時のわたくしの心の中は「父と二人で、一緒に、ドナー登録をしよう」という考えでいっぱいになっていました。「悪いんだけど、一足先に、お父さん、何だか怖そうだけれど、摘出手術とかいうのをやってみて。それで、誰かが、どこかで、ものが見えるようになるんだから。わたしもわたしの最期の時にそうするから。お父さんいいよね、いいよね？」わたくしはそう、父に問いかけていました。皮肉なことに、何日間か考え続け、やっと担当医にその意志表示をしよう、相談してみよう、と思ったその日、父はその一生を終えることになってしまったのです。

病院側の手配で夜にも関わらず、角膜センター・アイバンクからコーディネーターの方が駆けつけていらっしゃいました。具体的には何も知らないわたくしの登録に際し、その手順や意義を丁寧に説明して下さいました。登録がすみ、ちょうど、病室のドアのところで、担当医と今後はどのようにしたらいいのか、何が問題で、どのように事が運ばれるのか、というような話をしていたとき、父の様子が変わりました。それまで昏々と眠り続け、閉じていたままの両目を父はしっかりと開けました。まっすぐにその視線を伸ばし、この世で父が、その目で最後に見たものは、わたくしでした。父は目をぱっちりで見開き、わたくしの顔をそれに焼き付け、静かに目を閉じ、旅立って行きました。わたくしはその時の父の顔が神々しいまでに素晴らしいように見えました。ささやかながら、カ一杯、人生を生き、戦い抜いた人は、こうも穏やかで、美しく、遅しく、そして安らかな顔をしてその命を終えることができるのだと思いました。先程のコーディネーターとのお話しの中で一つ、強く、わたくしを安心させる言葉がありました。「お顔を変えるようなことは、絶対ありません。」という約束の言葉です。その約束は、もちろん、確かに守られました。何度も手術を経験した父の身体にこれでもかと、またメスを入れることに少々ためらいがありました。でも、父が痛みを感じることはないのです。そう自分に言い聞かせました。

後に、亡くなった父は、感謝状をいただきました。そこで「社会の規範となる崇高なお心」と賞されていました。難しい言葉ですが、わたくし風に解釈させていただきますと、実に簡単なことです。”人が人に対して優しいことを行った”ということだと思います。この献眼に関して言えば、その人が人にする優しい行為に最先端の医療技術が如何なく発揮された最たるものだと思うのです。まだまだ人の情感、昔からの慣習、日本特有の土壌に、この角膜移植医療が根付くには問題があったり、時間がかかったりするのですが、根本に目を向け、その始まりの気持ち

の大切さを重んじるのであれば、古い考えにとらわれることから抜け出す、ほんの少しの勇気と、精神の成熟をわたくしたちは修得すべきではないでしょうか。それが、ただ、辛いだけのことなのか、痛いものなのか、「なくなってまで、かわいそう」なのか、理性的に考えることのできる成熟した国民に、わたくしたち日本人もなっている頃ではないでしょうか。わたくしたちの国、日本は、そうなるにふさわしい発展した国だと思うのです。今、縁あって、お会いすることのできたコーディネーターの方々は、元々、こういった分野の先進国であるアメリカ式のドネーションのノウハウをいかに日本風のものに翻訳していくか、苦心されていることと存じます。そのご尽力が実を結ぶか否かは、わたくしたちが、人に対して、どれくらい目をやり、耳を傾け、優しくなれるものか、努力することにかかっていることでしょう。昨年、父とわたくしで成る、一家族に降りかかった一大事を経て、多くのことを栄養にして一回り大きく深く成長したわたくしが、出来上がりました。今、残りましたのは、父を誇りに思う気持ちと、人の優しさが人に届いたという事実です。わたくしは、この二つがわたくしの中にある限り、残りの人生を、一生懸命、悔いのないよう生きていく努力ができると信じております。

「移植患者・ドナーファミリーの声」

朗読：:

(日本俳優連合)

患者さんからの声

1. (62歳／女性／)

白黒テレビからカラーテレビに変わったときのような驚きと感動の毎日です。

この明るさを、ご提供いただいたドナーの方はもちろんの事、ご家族の理解と沢山の方々の御尽力の賜物だと感謝してます。

私の大事な大事な宝物として大切に致します。

これからは今までできなかったことに積極的に取り組みたいと考えています。

本当に有り難うございました。

2. (38歳／男性／平成9年8月14日、平成10年8月13日手術)

手術が終わった翌日、眼帯をとり、おそろおそろ目を開けると昨日まで物がよく見えなかった

のですが、なんと先生のお顔、お姿がよく見えるではありませんか。本当にびっくりするやら、感動するやらで、とても嬉しかったです。角膜を提供してくださった方、手術してくださった先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

私は角膜移植を受ける前までは視力低下がはげしく、仕事にも支障を来していました。女房と幼い子供が3人おりますので仕事は辞めるわけにはいきません。そんな時、素晴らしい病院や先生方に巡り会えたことは、とても幸運だったと思っています。

最後に、角膜を提供してくださった方、あなたがくださった目は、今私の目の中でしっかりと輝いています。いつまでも、いつまでも大切にしていきます。本当にありがとうございました。

3. (68歳／男性／)

私は市川総合病院で角膜移植をしていただきました。

手術、入院に際しましては、先生方や看護婦さんの親切な出会いにふれ、心から感謝しております。お陰様で徐々に良くなっております。

治していただいた目を大切にします。また、角膜を頂いた方のご冥福をお祈りいたします。皆様、色々と有り難うございました。

4. (50歳／女性／)

昭和61年11月18日、角膜移植手術の緊急連絡を受けてかねてより準備していたポストンバックを持って病院へ向かいました。前年60年に主人が急死、二人の子供どうやって育てていくか無我夢中の時でした。

右眼の手術は順調に進み、一カ月後退院。世の中が”パツ”と明るくなる思いでした。頂いた角膜が子供さんの角膜であったと知り、家に帰ってわが子の目をじっと見つめて、もし今「この子の目を下さい」といわれたら、「はい」と言えないと思い、改めてご両親、ご家族の思いが伝わり、大切にしなければと思いました。

見えることの感激、見えることの喜び、仕事も家事も楽しくて楽しくて、あっという間の10年でした。

右目の角膜移植の時、まだ小学生だった子供達も今年は長男が大学卒業、次男が大学入学と成長してくれました。これも角膜を頂いたお陰と感謝し、手術を受けた11月18日を命日と思い、供養させていただいております。また、今回は左目の角膜を頂き、思いは同じです。角膜を提供して下さる方そしてそのご家族の方に感謝の気持ちをお伝えしたくてペンを取りました。これからも感謝を忘れずに大切にに使わせていただきたいと思います。子供達ももうすぐ巣立っていきます。

右目と左目と私は三人で一人です。一生仲良く暮らしていきたいと思っています。

本当にありがとうございました。

5. (78歳／女性／)

この年齢になるまで角膜移植を受けるという思いがけないことになるなんて考えられな
い・・・全く他人事と思っておりました。併しついに角膜移植していただくことになりました。
今は亡き主人が角膜の提供を申し出ていたとして、果たして私はその時深い悲しみの中でそれに
同意できたでしょうか。とても悩んだことと思います。なのに自分は見ず知らずの方、それにそ
のご遺族の大きなご厚意をいただいて無事に手術を終えられることができました。何と感謝した
らいいでしょう。大切に大切にせねばと心に誓っております。

私はここ四年間に様々な手術を四回もしました。しかし今回、手術の大変さを身をもって体験
いたしましたが、優秀な先生のご執刀をいただき、とても幸せに存じております。今、術後二
ヶ月が経とうとしています。今までは痛みと眼帯に明け暮れ、長い間苦しんでおりましたが、今
はその苦痛からすっかり解放され、日々感謝です。全く期待していなかった視力も出て参りまし
た。いよいよ三ヶ月に入りますが、提供して下さった方のご冥福とご遺族の方々への感謝とお幸
せを朝夕仏壇に礼拝しております。

なお、角膜を提供して下さる方々が一人でも多くなりますように協力したいと思っております。
有り難うございました。

6. (7歳／女性／)

生まれた時から白目とくろ目のあいだにデルモイドという白いものがついていました。それを
わたしたちかぞくはてんしのなみだとよんでいました。

それで、かくまくを下さった人がてんしになったときに、わたしの目についていた、てんしの
なみだをてんしにかえてくれて、わたしには大きくてきれいなくろ目がプレゼントされました。

このきれいなくろ目を大じにします。

どうもありがとうございました。

ドナーファミリーからの声

1. (59歳／男性／)

弟はまだ自分は死ぬとは思っていませんでした。

死後、病院からの連絡でアイバンクのことを言われました。私たち兄弟は八人ですので私一人の意見では返事はできないと思ひまして、新潟の実家に電話し、そしてもう一人群馬の姉に電話し、両方とも是非という事で即、病院の方をお願いいたしました。私の母が目が悪く、よく言っていた言葉がありました。「子供八人皆良い子だし、その連れ合いも皆良い人だし、欲を言えばせめて片目だけでも見れば私はどんなに幸せか」と。その言葉が母の死後20年たった今でもずっと心から離れませんでした。後日、アイバンクコーディネーターの方が感謝状を持って事後報告に来て下さいました。お二人の方に移植したこと、術後の経過も良好とのことをご知らせしました。生前中はまず自分のことより人のことをたいせつにした心優しい弟でしたので、死後もアイバンクを通して人の光となって役に立っていることを思うと本当に良かったと心から私たち兄弟は思っています。

2. (80歳／男性／)

一年前の父の入院当初の頃を思い起こしています。

膵臓癌の告知を受け、一縷の望みを託して入院した一条会病院。夜も痛くて眠れないとこぼしていたのが嘘のようにやがて一時帰宅もできるまでになったのは秋風が立ち始めた頃でした。確かその頃だったと思います。病院の掲示板を見、看護婦さんから説明を受けてアイバンクへの登録を父が思い立ったのは。” ああ、いいことをしたね” 程度の軽い感想しか持たなかった私の認識を大きく変えたのは、11月に放映されたNHKの「クローズアップ現代」、そこに映る父と母、そして篠崎先生をはじめ、コーディネーター、スタッフの方々の使命感に満ちた行動でした。

やがて年が変わり、2月、父は亡くなりました。よく晴れた日でした。寒風の中、主治医の先生に抱かれながら大切に運ばれていく父を見送って、私たちは悲しみの中にも充実感を感じ、父の遺志の生かされたことに安堵を覚えました。そして何日か経っていただいた連絡、手術は成功し、父の両眼はお二人の方の光を取り戻すお役に立ったとの報に接し、私たち家族一同、ささやかながら社会貢献できたことを喜び、またアイバンクへ登録、献眼した父を誇りに思いました。

3. (81歳／男性／)

「お前達が現役のうちに逝きたいものだ。」

「じゃ、お父さん10年以内よ。」

「鐘、太鼓でにぎやかに送ってくれ。」

「通夜にはうまい酒をいっぱい振る舞うよ」

家族15人が集まると来るべき(!)父の葬式を酒の肴に大笑いしていたのは2、3年前のことでした。

昨年、父は肺癌の告知を受けましたが、己の人生を80年と決め、手術は受けず自然死を選びました。かねてより役立つところはすべて役立てるようにと臓器移植ネットワークに登録もしてありました。臓器提供は叶いませんでしたが、角膜提供をすることができ、父の遺志が生かせ、喜ばしいことと思っています。

その後、女のお子さんに移植手術がなされたことをお聞きし、

「お父さん、すばらしい。」

「おじいさん、私たちより長生きするんだね。」

と嬉しく思っています。

命長き時代に、これもひとつの死のあり方と私たち家族は感動を持って受けとめております。こう思えるのも父が自分自身の生を「納得」して終えたからでありましょう。

交通事故でも死ぬ、心臓病でも死ぬ、癌でも死ぬ・・・

死というのはとても身近にあることで、いつ出会うか分からないことです。

元気な内によく語り合っておうように父が言い残していったように思っているこの頃です。